

氏名（本籍）	カン 管	カイ 懷	ヒン 賓（中華人民共和国）
学位の種類	博士（美術）		
学位記番号	博美第124号		
学位授与年月日	平成16年3月25日		
学位論文等題目	作品「回廊」 論文「空白」の芸術 - 非視覚的空間構築の意義		
論文等審査委員			
（主査）	東京芸術大学	教授（美術学部）	坂口寛敏
（論文第1副査）	”	助教授（ ” ）	佐藤道信
（作品第1副査）	”	教授（ ” ）	野田哲也
（副査）	”	”（ ” ）	櫃田伸也
（ ” ）	”	助教授（ ” ）	木戸修
（ ” ）	”	”（ ” ）	中村政人

（論文内容の要旨）

空白は存在と虚無、事物と事物間の特殊な領域に関係する。空間の中の空、絵画の中の余白、詩歌の中の休止、映像と舞踏の休止（pause）のようでもある。本論文の命題である“空白の芸術”は語義学、修辞学、歴史学、社会学などの角度からその意義を更に進め、本質に迫ろうとするものである。空間の中に時間の要素を導入することは、視覚を超越した時間と空間の結合体たらしめることであり、常に流れ動く時間と空間は、ここで一人の芸術家のコンセプトを体現するのである。またそれは知覚的表象と経験的表象の間で、我々の視覚の移動を喚起し、今日に於ける諸問題へと意識を導いてゆく。

“空白の芸術”は日常と非日常の概念を越えて、知覚的及び経験的表象をその内部から超越しようとするのであり、自由に往来する時空の内と外という精神的な境地と芸術表現への原動力であり、同時に見るものにもこの原動力を十分に体験させようとする。形式と視覚と空間の概念は分ち難い関係にあり、ときとして空白の存在の前提となることもあるが、しかしそこに順列はない。“空白の芸術”は東洋の伝統的な思惟の積極的な精神によって現代文化の読解へと向う。人々を物質に対する視覚の混鈍状態から喚び覚まし、知覚的な表象から深い理性的な経験へと導きつつ、理性ではとらえきれない悟り、自覚的体験へと至る。即ち見るものを単純な鑑賞者としての角度から、やがては自分自身の自己世界の主人へと導くのである。“空白の芸術”は芸術家本人が空間の概念に立ち向かうだけでなく、第三者も自己を見つめ直す機会となる。即ち第三者を如何に導くかだけでなく、現代社会にとって必要とされる心のあり方と枠組みにもアプローチを試みるのである。

無論、“空白の芸術”は非視覚性空間の構築という意義であるが、これはここ数年の私自身のインスタレーションを中心とした仕事の中でも大きな意味を持ってきた。私が日本や中国などの各

地で発表してきたインスタレーション作品では、立体及びかたちの有るもので空間の雰囲気構築し、あわせて作品の中での空白の意味を強調することである。

より詳細に述べるのならば、私は一般にインスタレーションと称されている作品に、東洋の古典建築と絵画に見られる美学的概念と言語方式を引用し、現実や社会の様々な問題及び芸術そのものの理解と方向性を表現しようとしてきた。現代の芸術に関する問題は、非常に大きな程度で作品の言語システムの構築と運用の方法は、実際の社会や美学的な範疇に関わってきていることだろうと思う。そこで現代に於ける東洋の思想や言語により、インスタレーションの今後の姿を探求すると同時に、その既成の概念を打破し超越し、視覚的方式から体験的な方式に如何に変化させるかを考えてゆきたい。そのためにも、東洋古典美学に見る借景、天地、空白などとの概念や、やはり東洋の時間と空間に関する概念を導入し、各々異なる角度からこの空白という意味に触れてみたい。インスタレーションを視覚的領域にのみ留めさせることはせず、“インスタレーション”を脱却するための、その文脈と今日との接点を探し求める努力を厭うものではない。

本論文では、“天と地の接点”“鍛練する空間”“空間の読解”“演繹空間”“無形宇宙の創造”の五つの章により、“空白の芸術”のコンセプトは人間が世界を認識して創造する過程の中で、そのひな形を形成しようとするということだと述べてきた。また一方では“空白の芸術”と東洋の美学と思惟は決して分つことのできない関係であるとして、同時にこれは哲学、もしくは美学的な思考だけに止まらず、我々の日常と文化の中にまで浸透するものであると述べた。“空白の芸術”は、東洋の思想体系の中でのみ事にあたり事を論じ、定義するものではない。西洋の現代芸術の中にも私は多くの非常に近似した事例を目にしている。私はマルチ・カルチャリズムの視点から“空白の芸術”の意味を探究する。言わばこうした西洋の一群の芸術家たちの思考と仕事を一種の反対方向からの超越であり、空白の概念とよく似たものとして啓示的な意義に富む例証であると考え。最後に私は現代アジアの探究をその主軸とする一人の芸術家として、私自身の芸術の実践と思考を結合させ、“空白の芸術”の可能性とその意義を申し述べた。

私は本論文の各章各節のなかで、形式や語法に関して複数の様式に分析したり分類したりすることはしなかった。そうではなく、あるより広く大きい社会と芸術の関係性の上で考察を展開してきたのである。既に諸事例として伝統的な美学にも触れ、現代芸術にも通じるその先端性を併置したのであり、その内なる核となる部分と、外側の表象的な部分との関係に読解のメスを入れたのである。私はこの“空白の芸術”のコンセプトが“伝統から現代までを網羅する”ことを望む。だからこそ“空白の芸術”に関する研究は意義があるのであり、また加えて今現在に於いてその結論は必要とはされない。より広範囲での循環と演繹の過程の中で思考を一層積み重ね、この問題を押し進めることが肝心なのである。“空白の芸術”が現代芸術の非常に広大な舞台の上で、その指数と啓示性をしっかりと保持すること、これこそが私にとって一番重要なことであり希望なのである。